

紙幣の信用理論序説

— 貨幣のユートピア幻想について —

岩 野 茂 道

1. 観念化された金貨：

貨幣は、国内流通部面から外に出るとともに、その国で成長していた価格の尺度標準、鑄貨、補助貨および価値標章の地方形態を再びぬぎすてゐる。そして貴金属の本来の地金形態にかえる¹⁾。

マルクス『資本論』第1巻第1篇「商品と貨幣」の掉尾を飾るフレーズである。一国内にあっては、貨幣は紙幣や信用貨幣の姿を変えて流通することができる。また貨幣の尺度機能においては、その姿、いかなる物理的形狀さえも見せることなく全く観念的な標章、単なるイメージでもって十分に価格の標準機能を果たすことができる。しかし、ひとたび国外に出るや否や、そう言うわけにはいかない。貨幣本来の商品姿態、すなわち金（gold）を取り戻す、というのである。

周知のように、貨幣の国際流通部面から金が完全に姿を消してから45年が経過する。時のアメリカ大統領によるドルの金兌換停止宣言（1971年8月15日）を知り、多くの著名なエコノミストが「ドルはもはや単なる紙切れになった」と周章狼狽したことを思い出す。だからと言ってマルクスの貨幣論は傷つかない、原典の中にすでにこうした現象は予告されていたと主張し続けた教授がいた。岡橋保（以下敬称略）がその人である²⁾。いきなり銀行券の本質論争という晦渋極まる議論を始めるつもりは毛頭ないが、先ず岡橋理論のエッセンスを聞くことから始めることにする。

“アメリカの金保有額の減少によってドルが減価するように考え、金との交換の停止によって紙くずになるように騒ぐのは、銀行券の本質を信用の通貨形態とみないで、「金で支払うことを約束した約束証書」であり、「いつでも一定量の金と交換されるという信用に基づいて流

1) マルクス『資本論』第1巻第1篇、第3章「貨幣または商品流通」向坂逸郎訳（岩波書店・全4冊）1967年版の第1冊の184ページ。以下、同じ訳書を使用。

2) 岡橋保『金投機の経済学』時潮社（1972年）。因みに教授は岡本恵也の指導教授であったし、かつ筆者の最も尊敬してやまない学者の一人であった。

通する」金手形だと考えるからである（三宅義夫『金』49頁、50頁参照）。銀行券は金で支払われなくとも「ただの紙きれ」とはならないし、あるいは強制通用力をあたえられて、紙幣＝法定支払手段となるのでもない³⁾。では銀行券の本質は何か？そして問題のドルの国際流通根拠は？岡橋はこれらの問いに対して、商業信用＝為替手形→信用貨幣（銀行券）という仕組み（システム）を用意している。“それ（銀行券－引用者）は依然として銀行信用の通貨形態であり、信用貨幣である。すなわち、金貨で支払われなくとも商業手形が流通し、商業信用の通貨形態が存在し、流通しているように、それを基盤として、そのうえに銀行信用の通貨形態も発生し、流通してくるのである。”¹ 国内における、このような商業信用のメカニズムは、全く同じ仕組みで国際間にも通用する。国際間の支払い仕組みである外国為替手形による支払いがこれに相当する、として以下のように積極的主張が続く。

“外国為替手形はそれが外国の通貨に対する債権であり、外国通貨で支払われる手形だとすれば、もはや金で支払われようとそうでなかろうと、信用の通貨形態であることに変わりがない。そうしてアメリカの金保有量が減少しようと、それによって国際通貨としてのドルが減価するわけでもないばかりか、金との交換が断ちきられたからといって無価値な紙くずになるのでは決してない。国際通貨としてのドルはやはり信用貨幣なのである。”⁴⁾

論旨は明快である。だが、これではマルクスが世界市場では生身の金 (gold) が再現されるといった文言とは矛盾する。それでもマルク貨幣論の「価値尺度機能」の延長線上で金貨幣の余命が辛くも保たれている、としよう。ここでは銀行券は舞台を世界市場に延長されて、国際銀行券として把握されている。貨幣の尺度機能線上と、さらに貨幣の支払手段機能の延長線上で定義された信用貨幣＝銀行券が、現実の金の出動を無用にしている。そこまでは論理に齟齬はない。しかし、そうすると、金 (gold) を等価形態、すなわち貨幣形態として組み立てられた「価値形態論」は現実の世界経済のどこに痕跡をとどめているのであろうか？同じく貨幣の機能の一つに挙げられている「蓄蔵機能」としても、世界の大多数の諸国は安全資産としての基軸通貨ドルを中心にした外貨（ユーロ、¥そして新しくは中国人民元）で占められている。確かに国際通貨基金（IMF）統計表（IMS）は依然として gold の保有量の各国別詳細を、IMF 設立時の価値尺度単位（純金一トロイオンス金重量当たり \$35）と同じ重量単位の 21 世紀現在時点での市場価格を掲載している。1936 年当時の世界総流通貨幣量（全世界の中央銀行の貨幣供給量）に占める世界総金ストックの比率は 73.5% に比べれば、2007 年 6 月現在全世界

3) 岡橋保『前掲書』9 ページ。

4) 岡橋保『同書』同ページ。

の総金ストックが全世界の貨幣供給量に占める比率は0.00…%となって計算の意欲をなくしてしまうほどのものであろう。金が価格標準として観念的にのみ機能している、といってもそれを検証することは事実上難しい。たとえばアメリカ合衆国一個\$1の標準サイズのハンバーガーが、日本で¥100、フランスで120ユーロであれば、ここでは観念の世界で生きている金は姿を見せず、反対に一個のハンバーガーという商品そのものが直接に尺度として登場し、ハンバーガーに張られた\$・¥そして€（ユーロ）という各国の貨幣価値で示された価格形態が自立して機能する形が現実である。マルクスに言わせれば、それこそ人間の社会的関係を転倒した姿であり、そこに商品の物神性を読み取ることができるというのかもしれない。実は商品の物神的性格という概念こそ、『資本論』を書かした最も重要なキーワードの一つであった。このメタファーに込められた貨幣の思想性を問うこともまた本稿執筆の課題でもある。

1. メタファー（metaphor）としての商品の「物神的性格（fetishism）論」⁵⁾について

貨幣としての金（gold）が国内金融市場からはもちろん、世界市場からも消え去った現代の経済社会の実情からすれば、実在する金を真実の貨幣として析出したとされるマルクスの「価値形態論」の妥当性が、改めて問われているのだが、今は直接このことは置いておく。『資本論』第1巻第1篇「商品と貨幣」第1章第3節「価値形態または交換価値」において、貨幣の生成とその理論が叙述されている。貨幣は、膨大な種類の商品群の中から一つだけ（場合によって複数も成立する）排他的な機能において選ばれる。商品の交換過程という歴史的な経緯⁶⁾とその商品の特異性によって貴金属、なかでも金（gold）がその地位を獲得する。その純金の一定量〈例えばその重さを測る単位・1 Fine Troy Ounce〉に付けられる名目価格でもって

5) マルクス『前掲書』94ページ。

6) 金が一般的等価形態の地位に就く誘因は「価値形態」の展開論理とは直接結びつかない。マルクスもそのことを気にしていた模様で、すぐその後に第2章「交換過程」論を追加し、貨幣としての特別の品位と特性をうまれながら持つ金が古代から交換過程の歴史の中で自然的に形成された事実と言及している。しかし「形態論」は“歴史”から自立した“論理”の展開である。この難点は方程式の“逆転”によって解決されるような性格のものではないことをマルクス自身気付いていたはずで意図的に無視したと推論することができる。その証拠に現在われわれが手にしている『資本論』第1巻は、初版のなかの第1章商品・価値形態論が大幅に改定された“第2版”であること、初版のなかでは「第3の形態・価値形態」を抽出するための苦渋の方法（「附録A 第1版本文における価値形態に関する叙述」）が明確な解決が得られないままの文脈で終わっていることのなかに見出すことができる。なお『資本論』初版本の邦訳は昭和21年12月発行の宮川実訳・社会科学良書研究会（研進社）並びに1975年発行の岡崎次郎・大月書店を使った。

他の一切の商品群は価値量（生産に要する労働時間）の相対的価格が決められる。

このようにして商品の価格形態がいったん成立すると、人間社会のすべての関係が、その直接の、目に見える自然な形においてではなく、商品の価格形態を通してしか見えないようになる。人間の名誉や地位も商品化し、価格の序列で評価される。マルクスはこのような「人間に対して物の関係の幻影的形態をとる」ことの類似性を、“宗教的世界の夢幻境”に逃れるに等しいとして、これを「商品世界の物神的性格」⁷⁾と呼んでいる。マルクス自身による比較的わかり安い説明でもって“物神性”というメタファーが意味するところを解題しておこう。

「それゆえに、商品生産に基づく労働生産物を、はっきり見えないようにしている商品世界の一切の秘密、一切の魔術と妖怪は、われわれが身をさけて、他の諸生産形態に移って見ると、消えてなくなる。」⁸⁾ 人間関係が商品関係の網のなかでしか、あたかもそれ自体が人間関係の属性であるかのごとく倒錯して現れていることを気づかせてくれるのは孤島に自給自足するロビンソン物語であると述べ、その労働の性格のなかに人間本来の生き方の原型をみようとしている。少し長くなるがマルクスのロビンソン観を引用する。

「…（略）彼（ロビンソン＝引用者）は各種の慾望を充足せしめねばならない。したがってまた、各種の有用労働を成さなければならない。道具を作り、家具を製造し、駱駝^{らくだ}を馴らし、^{すなど}漁りし、獵をしなければならない。…（中略）…彼の生産的な仕事がいざいあるにあるにもかかわらず、彼は、それらの仕事と同じロビンソンのちがった活動形態に過ぎないことを知っている。したがって、人間労働のちがった仕方であるにすぎないことを知っている。必要そのものが、彼の時間を、精確にそのちがった仕事の間に分配しなければならないようにする。彼の総労働の中で、どの仕事割合をより多く、どのそれがより少なく占めるかということとは、目的とした有用効果の達成のために克服しなければならぬ困難の大小にかかっている。経験が彼にこのことを教える。…（中略）…ロビンソンと彼の作り出した富を成している物との間の一切の関係は、ここではきわめて単純であり、明白であって、M・ヴィルト氏すら、特別に精神を緊張させることなくとも、これを理解できるようである。そしてそれにもかかわらず、この中には価値の一切の本質的な規定が含まれている。」⁹⁾

7) マルクス『前掲書』96 ページ。

8) マルクス『前掲書』100 ページ。

9) マルクス『前掲書』100-01 ページ。商品社会の物神的性格を鮮明に浮き立たせるためとはいえ、あるいは異なる生産形態の一例とはいえ、およそ人間関係が一切断絶された孤島の中のロビンソンの労働を引き合いに持ってくる方法は、この世界が選択の余地が全くあり得ない状況であるだけに、かえって批判の対象としている物神性社会の豊かさを引き出してしまう危なさを思わせる。マルクスの生産概念自体にも疑問を抱かせる部分ともなっている。

商品生産社会の物神性を際立たせるために、マルクスは、更にもう一つの異なる生産様式を引き合いに出している。ヨーロッパ中世の農奴制社会の労働関係の例がそうである。「ここでは独立人『ロビンソン？引用者』の代わりに、すべての人が非独立的であるのを見出す—農奴と領主、家臣と封主、俗人と僧侶というふうに。人身的な隷属ということが、物質的生産の社会的諸関係にも、その上に築かれている生活部面にも、特徴となっている。しかしながら、あたえられた社会的基礎をなしているのは、まさしく人身的隷属関係であるのであるから、労働と生産物とは、その実在性とちがった幻想的な態容（すがた）をとる必要はない。」¹⁰⁾ このあと最後に更にもう一つ、『資本論』が何故に「価値形態論」（貨幣生成論）から始めなければならなかったことを、商品の物神性が最終的に超克される例証として、マルクスにしては夢みる少年のような率直さで語る「自由の王国、共産主義的生産様式」の幻想的世界を紹介しておこう。¹¹⁾

「最後にわれわれは、目先を変えて自由な人間の一つの協力体を考えてみよう。人々は、共同の生産手段をもって労働し、彼らの多くの個人的労働力を、意識して一つの社会的労働力として支出する。ロビンソンの労働の一切の規定がここで繰返される。ただ個人的である代わりに社会的であることがちがっている。ロビンソンのすべての生産物は、もっぱら彼の個人的な生産物であった。したがってまた、直接に彼のための使用対象であった。この協力体の総生産物は一つの社会的生産物である。この生産物の一部は、再び生産手段として用いられる。それは依然として社会的である。しかしながら、他の部分は生活手段として、協力体の成員によって費消される。したがって、この部分は彼らの間に分配されなければならぬ。…（略）」¹²⁾

マルクスが『資本論』の最も原理的要素をとして始めた「商品貨幣」のなかに、はやくも「物神性的性格」商品世界の「一切の神秘、一切の魔術と妖怪」¹³⁾を嗅ぎ取った資本主義生産様式は、商品→貨幣、そして貨幣から信用貨幣（銀行券）へ、最終的には信用貨幣が資本形態をとるや否や、現実資本からかけ離れた「擬制資本」の段階へと範疇が上向転換されるにつれて、“神秘性”はさらに深く錯綜したブラックホールへと成熟していく、少なくともマルクスは彼自身にとっては未完に終わった『資本論』の最終章をこのように描きたかったと推察できる。取り急ぎ『紙幣論序説ノート』の限りで資本主義社会における本来の貨幣析出への道筋を先ず銀行券からデッサンしてみることにする。

10) マルクス『同掲書』101-02 ページ。

11) マルクス『同掲書』103-04 ページ。

12) マルクス『同掲書』103 ページ。

13) マルクス『同掲書』100 ページ。

3. 銀行券と金貨との競合

商品性格を捨てることができないのであれば、生産様式の変化につれてその態様もまた新しい装いへと変化していく。どのように姿を変えても貨幣が生まれながらに持たされている商品性格は変わらない筈である。ところが現実には、そのようになっていない。すでにみたように世界市場においてさえ、貨幣は物理的素材性を全く捨てた形で、ドル預金や銀行券もしくは green-paper となって受容されている。これは矛盾である。価値形態論は貨幣（铸貨）形態で終わったままで捨て置かれている。現代貨幣は铸貨形態から完全に断絶している事実は無視されたままである。

銀行券は商業信用の発展に根差した商業手形の流通に発券の原理的基礎をもっている。商業手形は生産者や商人たちの間に信用の授受が相互に交わされることを前提にしている。取引がその場での現金授受で済まされるのではなく、一定の期間の後に実行されることが可能となる関係が成立していなくてはならない。いわゆる信用関係の成熟である。この商業手形は、最初は私人間での流通ではじまったが、いつの世でもそうであるが、一時でも早い現金の入手を望んでいる商人のために彼らの債務を引き受けてくれる仲介業が発達する。銀行業の出現である。もとは地方の豪族や資産家であったと思われる銀行は商人たちの手形を、自らの銀行手形で買い入れることによってその要求を満たしてやる。その場合、満期日までの利子を天引きして（割引）、現金ではなく、銀行手形という信用手段でもって買い入れるのである。¹⁴⁾ この銀行手形（約束手形）が今日の銀行券と呼ばれるものの原初形態と考えることができる。まずは兌換銀行券が、商業手形の割引代金として振出すところの、中央銀行（発券銀行）の一覧払の約束手形の形で誕生する。「たいていの国々あっては、兌換銀行券の発行が半官半民の中央銀行の独占にゆだねられ、その銀行手形はもっとも信用が厚く、法定支払手段（gesetzliches Zahlungsmittel）すなわち法貨（legal tender）とさえなっている。」¹⁵⁾

ここで注目しなければならないのは、兌換銀行券の貨幣性についてである。

「兌換銀行券は、もともと商業貨幣にかわってあらわれた代用貨幣^{だいよう かへい}であるから、その基礎となっている手形の満期とともに消滅し、商業流通のそとにでることはできない」¹⁶⁾。法貨であるが貨幣ではない。貨幣あくまで金貨幣のみであるから信用貨幣といえども代用^{だいよう}でしかありえない。本物の貨幣ではないと、マルクスは言うのである。確かに、「手形は満期までのあい

14) 詳細は岡橋保『貨幣論』春秋社（1957年）117-18ページ参照。

15) 岡橋保『前掲書』121ページ。

16) 岡橋『前掲書』同ページ。

だ、時には貨幣として機能することができるが、満期日の到来とともに、本来の貨幣がかわってあらわれなければならない。けれども債権と債務が相殺される場合には、もはや、本来の貨幣の必要でなく、そのかぎりでは、手形は絶対的な貨幣として機能することもできる。」¹⁷⁾ 実は、ここに挙げた兌換銀行券（手形）に関する岡橋の説明のなかには、貨幣についての新しい概念が生まれる重要なヒントが潜在している。残念ながら重金主義ならぬ“重金本位主義”に支配されていた当時の岡橋は、手が届きそうなどころまで来ていた貨幣観の転換に気が付かない。時代の展開は、兌換銀行券が出現した段階で、それはもはや貨幣（当時の金貨）^{だいよう}の代用ではなく、貨幣としての金（gold）よりも、はるかに本来の貨幣性を保持する機能を見せるようになっていた。岡橋はそれを無造作に「手形性」と呼んでいる。当時（1972年）そうした抽象的な用語で新しい現象を表現する土壌が十分に育っていなかった思想風土による制約を考えれば、教授の思考は極めて斬新な感覚であったのだが、兌換銀行券に付けられていた“金兌換”は、銀行券の機能にとってはすでに本質的なことではなく、中世期から引き継いだ制度上の紐帯に過ぎなかったことが、いろいろな形で弾けだしていたことをイギリス金融史のなかでも指摘することができる¹⁸⁾。1797年2月25日イギリス政府がとった正貨支払停止以来、周期的恐慌のたびごとに余儀なくされた銀行券の不換化が常態化し、最後に不換銀行券が流通通貨の主役の座を占めてきたときに、改めて金の持つ意味を正面から問われることができる舞台装置が出来上がる。

4. 貨幣（紙幣信用）の誕生

①不換銀行券の紙幣化について：

恐慌のたびごとに発生する金貨への兌換請求（すなわち金の国内流出）と海外流出に対して、政府と中央銀行は正貨支払いの禁止法令の公布¹⁹⁾と兌換銀行券の金兌換停止でもって応

17) 岡橋保『前掲書』121ページ。

18) ソーントン(Henry Thornton), *Paper Credit in Great Britain*, (渡辺佐平・杉本俊朗訳『紙幣信用論』1948年、東洋経済新報社)。第4章「イングランド銀行に関するスミス博士の考察」のなかの“銀行券の過大発行”論争を参照のこと。もちろん、ソーントンはいわゆる名目主義の紙幣論を主張するようなエコノミストからは最も遠い存在の、金貨をベースにした銀行券の発行と管理に考えられる最高レベルの配慮を示したイングランド銀行の理事でもあった。しかし彼の重厚な紙幣（銀行券）に関する記録と理論は、すでに金属貨幣に対する不換銀行券の、機能上の優位をしっかりと見定めていて、21世紀の金融政策の観点から見ても斬新さはひとときわ光っている。本稿は彼の理論を解明していくための準備的ノートでもある。

19) 金融史のなかで最も話題性の豊かさで記録されている法令公布の一つは、1797年2月25日イギリス政府がイングランド銀行の正貨支払いを停止させる勅令である。詳細はソーントン『前掲書』とりわけ「第4章」参照。

えてきたが、これが常態化してくると、不換銀行券が貨幣として一般的流通域を支配するようになってくる。マルクスを含めて古典派経済学は、すでにこの事態は想定内で、いとも簡単に代用貨幣論で説明し、この難題を解決したことになっている。すなわち貨幣の「流通手段機能」の自立化論である。一般的な、経常的な取引流通の領域内での貨幣の流通必要量は安定的、静態的であるだろうから、この範囲内の貨幣量に関する限りは代用貨幣で十分であり、代用貨幣だから、不換銀行券でも紙幣でも問題はない。その限りでは金貨（gold）の直接の登場は不要である。しかし「流通必要量」を超えれば金兌換請求の恐怖が待っている、というわけで依然として金本位制は原理的に貫かれている。しかし不換銀行券がかくして法貨となり国家の認証下に入ると、クナップの『国定貨幣説』²⁰⁾に門戸を開くことにもなる。例えば現在の U.S. ドルはアメリカ連邦準備制度の発行による正真正銘の銀行券であるが、同時にその政策上の管理は財務省証券を発行する U.S. 財務省との緊密なる共同作業のもとで初めて経常的に運営されている現実を鑑みると、クナップの銀行券論が、かつてのナチス全体主義に利用されたということのみを取り出し、時代を先取りした詳細な研究成果として新たな脚光を浴びるに十分の評価をうけていないのは残念である²¹⁾。

さてクナップの表券主義による貨幣国定説についての詳論は後に譲るとして、現代貨幣を定義するに際して、国家の強制通用力に軸足を置いた不換銀行券の貨幣性強調、あるいはそれと同じことだが金貨を基礎とした代用貨幣論は、すでにみたように国境を越え世界の領域で有効に働いている U.S. ドルの受容性を説明することはできない。現代の貨幣の中の貨幣である銀行券は、マルクス価値形態論の延長線上では定義できない。新しい地平のなかで定義されなくてはならない。

② 銀行貨幣の特質と信用創造：

銀行券が手形決済のメカニズムから発生したことは既に述べた。ここで銀行券という場合、原理的には必ずしも現代銀行貨幣を代表する中央銀行券を意味する必要はない。ある地方を代表する大都市の資産家からなる為替取扱業者が信用できる商人 A が持ち込む為替手形を「自己の手形」で買い取る仕組み（図柄）を描いてみよう。この為替取扱業者をその地方を代表する銀行に置き換えると、商人 A が持ち込んだ資産（為替手形）を、本来の債務者である商

20) Knapp; *Staatliche Theorie des Geldes* (1905). 宮田喜代蔵訳『貨幣国定学説』（大正 1 年（1922）岩波書店。

21) 岩野茂道「国家と貨幣—クナップの銀行券について—」鹿児島国際大学経済学会『地域経済政策研究』第 8 号（2007 年 3 月）参照。

人Bにかわって買い取るときに使われた「自己の手形」というのは、その地方銀行が発行した銀行引受手形と見なすことができる。この銀行引受手形は、金本位制時には公的機関とのタッグマッチが成功し、正貨と見なされていた金貨との兌換を請求できる“兌換銀行券”に成熟していく歴史的プロセスについてはこの段階では省略しよう。この兌換銀行券が不換銀行券になり、金融取引にかかわるすべての分野で貨幣としての機能を支配しているのが20世紀後半以降現在の実情である。ここで本来は金貨での支払い義務を負う兌換銀行券が、何故自らが最終的な支払手段として取引を終了させることができる“不換銀行券”（最終的支払現金）に転化したのか？は、まだ明示的に説明されていない。階梯を踏んで説明しよう。まず銀行貨幣の特質とはなにか？

大学の講義で、“日本銀行券とは何か？”と学生に問うたとする。おそらく初めての受講生に正解を期待するのは無理であろう。正解は：「日本銀行の債務である」。日本銀行の貸借対照表（別表）を見れば歴然としている。負債勘定の筆頭に日本銀行券と明記されている。資産勘定の側には、負債である銀行券の発行を担保する資産が列挙されている。銀行券の特質を語るのに、それが「債務」であることから始めるには特別の重要な意味がある²²⁾。かつて貨幣のなかの貨幣であった金（gold）は資産の側にあることに注目してほしい。このように中央銀行（＝発券銀行）勘定項目で銀行券が負債の側に、金が資産の側に記録されていること自体は、兌換銀行券時代も銀行券が紙券化した現在も変わりはない。変わったのは資産としての金（gold）の比重である。別表にみるように2015年末現在の日銀勘定資産総額に占める金の割合は0.0011に過ぎない。世界共通の貨幣定義のなかで最も厳しい基準であるM1（＝銀行券＋当座預金）に占める割合でみても同じく0.0012とかわらない。因みに既に金本位制は事実上崩壊後の1936年末の米国とイギリスの数字で見ると、中央銀行の銀行貨幣（銀行券＋当座預金）に対する貨幣用金（monetary gold stocks）の比率は、アメリカが84.8%（11,250/13,135：単位は100万ドル）、イギリスは134.8%（4,425/3,285：単位は同じ100万ドル）であった。²³⁾ 因みに、1931年当時における世界の総流通貨幣＋当座預金に占める貨幣用金ストックの比率としては、厳密にはいろいろの出所と計算方法の違いもあるので一様ではないが、国際決済銀行データでは55.7%となっている²⁴⁾。すなわち、国際金本位制のほころびが拡がるなかでも辛う

22) 楊枝嗣朗『歴史の中の貨幣』2012年、文真堂。楊枝はかなり早い時期から貨幣を、とりわけその価値尺度機能において地金や鑄貨などいわゆるリアル・マネーと区別されたイマジナリー・マネー（計算貨幣）研究の、我が国における先駆者であったが、新著ではさらに第6章「貨幣の抽象性と債務性」を設け、改めて債務性」という概念を明示し、貨幣と鑄貨を峻別して貨幣の抽象性に言及している。

23) Friedrich A Hayek, *The Gold Problem in the Good Money*, Part II, p 179.

24) Ibid ; p185.

じて維持されていた 1930 年代半ばまでは中央銀行マネーは金 (gold) によって完璧にカバーされていたことがわかる。ここでの銀行券は、商人世界が作り出した、債権と債務の相殺メカニズムを全体としての統括し、システムが円滑に運航するための決済手段 (為替手形) の性格よりは、最終支払手段としての正貨 (金貨) の身代わり (代用) 役の性格が強く押し出されている。いわゆる銀行券の金債務論である。しかし経済発展とともにやがて手形決済メカニズムが、空間的規模と信用供与の時間的大きさ (いわゆるレバレレッジ) を拡大するにつれて、銀行は正貨で準備を保有しておく必要性を急速に減少させることの有利さを見出していく。ミクロ的には、利子を生まないだけでない保管コストが高い正貨保有は、貨幣としての機能よりは危機時に対応する不安定なアンカー (wobbly anchor) として観念される度合いが強くなる²⁵⁾。同時に、現実の貨幣として銀行券の役割が大きくなると、金 (gold) の動きは、銀行券の流通に対して期待されていた役割とは反対の信号を発信するような事態を作り出して、そのマクロ経済的役割にも戸惑いを持たせることになる²⁶⁾。金本位制が教科書的なシステム—金 (gold) の保有量に比例して通貨量が調節され、したがって国際間の取引を含む通貨流通を含めた秩序を可能にしたのは、金 (gold) の絶妙なる貨幣機能を軸点とする自動制御装置—として現実に機能した期間はほんの僅かであったと考えられる²⁷⁾。

25) ハイエク『貨幣発行自由化論』The denationalization of Money: An Analysis of the Theory and Practice of Concurrent Currencies; 邦訳・川口慎二、東洋経済新報社、1988。

26) 例えば 1797 年 2 月 25 日の「正貨支払い停止」をめぐるアダム・スミスとの論争で、金 (gold) の枯渇は銀行券の過大な発行の結果ではなく、反対に銀行券の貸出し増 (銀行券の増加) は金 (gold) 流出の結果であった、と通常の常識を覆すスミス批判には鋭い洞察がみられる (Thornton; 『前掲訳書』第 4 章、とりわけ 118 ~ 26 ページ参照。)

27) Karl Polanyi, *The Great Transformation*; 邦訳『大転換—市場社会の形成と崩壊—』(野口建彦・栖原学訳、東洋経済新報社、2009)。ポラニーは金本位制が古典的な意味での自動制御装置を働かせた期間として 1815 から第 1 次大戦勃発 (1914) までの 100 年をとっていた。第 1 部国際システム第 1 章「平和の 100 年」『邦訳書』8 ページ参照。

日本銀行の貸借対照表（2015 年 12 月末現在）

単位：億円

| 資産 | | 負債 | |
|------------------|-----------|-----------|-----------|
| 金（gold） | 4,412 | 銀行券 | 947,903 |
| 現金 | 1,881 | 当座預金 | 2,592,936 |
| 国債 | 3,380,763 | その他預金 | 11,644 |
| Commercial paper | 22,088 | 政府預金 | 288,495 |
| 社債 | 32,380 | 売り現先勘定 | 41,598 |
| 金銭信託① | 13,490 | その他①－雑勘定－ | 8,254 |
| 同上② | 71,830 | 同上②－引当金－ | 42279 |
| 同上③ | 2,793 | 資本金 | 1 |
| 貸出金 | 363,638 | 準備金 | 31,385 |
| 外国為替 | 64,949 | | |
| 代理店勘定 | 130 | | |
| 雑勘定 | 6,239 | | |
| 計 | 3,964,493 | 計 | 3,964,495 |

出典：日本銀行『金融経済統計月報』2016 年 2 月号

注：資産と負債の数字差を含め原典通りである。なお、「資産」の一部を構成している「現金」は普通使われている意味でのものではない。

すでに 18 世紀の終わりごろになると、銀行券の流通量は金の国外流出（国内金量の減少）を埋め合わせて増大してくる。この現象はスミスが叙述した記録内容と真逆なメカニズムを示している²⁸⁾。銀行券が貸付の増加によって急速に増加してくると、現実の流通必要量に占める金の比重は、銀行券の増加に反比例して減少していく。当然のことながら地方の商業銀行の場合、現金（金貨）払底という危機に集中する金兌換請求が発生したときは、潤沢な金準備を持つ中央銀行（イングランド銀行）に助けを求めて殺到する循環性恐慌のたびごと発動される正貨支払停止に、人々は新しい銀行券（不換期間中の）への対応を少しずつ変えていくことになる。尤も 1797 年（正貨支払い停止発令）当時の銀行券（兌換銀行券）はロンドンにおいてすらまだ十分には庶民階級のものとはなっていなかった。彼等はそれまで、鑄貨（金貨）という

28) ソーントン『前掲書』第 4 章「イングランド銀行に関するスミス博士の考察」、すでに脚注 26 でなかで触れたように、“正貨支払いの停止は銀行券（paper）の過剰発行によるものではない”ことを当時の統計でもってスミスを批判している個所（112～130 ページ）は白眉、詳細は紙幣論概論の枠をはみ出すので、本稿の続編で準備している『ソーントンの銀行紙幣論』に譲ることとする。

平常用いられる品物（article）でしか支払うことしか経験がなかったので、「1ポンドの銀行券が金と同じようにどんなものでも購入するであろうことを最初は知らないために」²⁹⁾、何らかの騒動を起こす危険性があった、という段階だから、銀行券といっても当時のものは主として営業を営む商人ないしは比較的上流の階級でしかあつかわない一覧払の銀行手形であって、金額も1ポンドおよび2ポンド銀行券のような高額券であった。それゆえに「暫しの間は引き続き労働者たちには貨幣（金鑄貨 - 引用者）で支払い、そしてさしあたり新規の1ポンド及び2ポンド銀行券は比較的に上流の階級の手を通して流通させることが緊要であった」³⁰⁾。中央銀行券が小口の鑄貨にかわって一般流通に階層を問わず広く浸透するにはある程度の年月経過が必要であったと思われる。

さて、少し回り道をしたが本章の主題である現代の銀行券に話を戻したい。くどいようだが、銀行券は「中央銀行の負債である」ということが、貨幣および金融政策を考えるうえで何故そんなに根本的に重要なテーマなのか？を思考の柱にして筆者の論述が進められていることを改めて留意してほしい。“銀行の業務は預金を受け入れ、その資産を元本に貸付を拡大し、預金金利と貸付金利の差額を利潤の本体としている企業である”、したがって“預金の保管や単なる金融仲介業務”に留まる静態的循環の枠内での金融業を銀行業務として理解されているのが金融実務に携わる人を含めて、通常の常識かもしれない。しかし、そこからは現代貨幣の本質に触れるものを引き出すことはできない。銀行の貸付けは、予め受け入れられている預金量の枠内で留まるものではない。預金量の枠を超えた貸付がどこまで許されるかは、“過剰な銀行券の発行”をめぐる古くから繰り返され、今もなお金融政策の中心課題の一つとして続いている難題である。それでも銀行は先ず貸付を拡大しなければならない。銀行の貸付は、銀行勘定（B/S）のなかでは先ず資産項目の増として記録される。同時にその貸付は借受人名義の預金の増として同じ金額が負債項目に記録される。借り手がその預金を全額引き出したとしても、それは誰か他の人の名義に変わるだけで、その貸付が返済されない限り銀行勘定から消えることはない。たとえば5年の返済期限付き10億円の貸付けがなされた場合、その名目での10億円は5年後に負債項目から消えるが、その10億円の支出が新たに作り出す事業展開が生み出す資金総額はその企業が失敗しない限り銀行帳簿の上では少なくとも10億円を超えていなくてはならない。今日誰でもが知っている、この銀行貸し付けが新しい現実の実需を導き

29) ソーントン『同書』第4章129ページ。

30) ソーントン『同書』同ページ。

出す預金の創造のメカニズムは銀行の信用創造として共通の知的資産となっている³¹⁾ それにもかかわらず、経済学者でさえ、銀行貸付や銀行投資こそが預金を創造するものであることを認知することは極度に困難であった。それはかのケインズ卿の場合にあっても必ずしも鮮明ではなかったほどであった。³²⁾ なぜその認知が困難を極めたか？ 出発点は貨幣を商品貨幣、すなわち何らかの実体を持つ、目に見える実物からなる鑄貨（金貨）があって、その上に積み上げられた信用システムとしてはじめて成立する事業が、銀行業であると一般に考えられている。少なくとも金融論の主流においてはそうであった。先ずは貨幣（正貨）を保有する者がいて、それを貯蓄する金庫が銀行であり、銀行は一般においてそうで人や企業（政府も含む）から預かった預金の枠内でこれを必要とする他の企業や個人や政府に、あるいは他国に貸し付ける仲介人に過ぎない、いわば「他人勘定に基づく貸付」³³⁾、や貯蓄による預金と考えるのが生活人一般の常識であろうからである。しかしこのような画面からは銀行に固有の仕事は見えてこない。

確かに自ら働いて貯蓄した貨幣を自宅の金庫の代わりに銀行に預けた（この場合銀行に貸付けた）側から見れば「債権」であり、彼はまた法律的にも法定貨幣に対する請求権者でもある。ところが、他方、銀行はもはや大衆から預かった法定貨幣の枠をはるかに超える量の自己債務を作り出すマシンとなっている。銀行から資金を借り入れた企業や個人の側から見れば、彼らは銀行に対して一方的な債務者である。したがって銀行からすれば、全く相反する二種類の債務証書を与えたことになっている。単純なる貯蓄者への債務証書と、借り手から受け取った約束手形に見合った債務証書の二種類である。後者は貸付業務が新しく創造した貨幣であ

31) この形（銀行預金）の信用創造は、イノベーション論の創設者である Joseph A. Schumpeter の手にかかると更に明確な形で確定される。【「信用創造」(credit creation)の理論は、人為的な構想を以て明々白々たる事実を覆い隠さないで、これを〈率直に〉認知するのみならず、さらに十二分に発達した資本主義の特徴たる貯蓄と投資との特有な機構と資本主義的進化における銀行の真の役割とを、明らかに出すのである】*History of Economic Analysis* (1954) 東畑精一訳第6巻第8章7節、2345－46ページ。

32) John Maynard Keynes; *A Treatise of Money*, 1 The Pure Theory of Money, (1930), 小泉明/長沢惟恭訳・ケインズ全集第5巻貨幣論1第1編第2章、銀行貨幣「このことが起こる限り、能動的に創造される預金は、受動的に創造される預金の結果であるどころか、その逆である」23ページ。ところが、1936年の『一般理論』のなかではこの銀行貨幣の創造理論は消え去っている。おそらくケインズの難解な一般理論がジョン・ヒックスとアルヴィン・ハンセンによって ISLM モデルとして美しく定式化されて後、改めて新しい経済学の誕生として人気を独占するなかで、信用創造論はマイナーな地位に引き下げられたと考えられる。このモデルの成立条件の一つである需要曲線では明らかに一定の貯蓄を前提としている。銀行の貸付－投資が貨幣を創造するとした『貨幣論』(1930)段階のケインズとの矛盾については、恐らく両者を次元の異なる分析領域として意に介しなかった節がある。

33) Schumpeter, *ibid*, 日本語訳『同書』同巻・同章、2343ページ。

る。確かにこの部分は、直接に法定貨幣を作り出すものではない。しかし、貸付が新しく作りだした銀行貨幣は、新しい需要を生み出し、遠からずして「新しい実物資本の創造」を見据えているから、「経済的影響においては法定通貨を創造するのに殆どに近きものである」³⁴⁾。この現象は明らかに銀行貨幣に特有なもので、実際この銀行貨幣が造る信用創造こそが、(話が飛躍するが) この信用創造が第2次大戦後飛躍的に拡大したことが、世界経済発展の様相の性格を全く異なるものに变化させた最も大きな要素の一つと言っても過言ではない。銀行の貸付け業務それ自体が銀行の「債務」を、すなわち“信用”を新しい貨幣概念の内容とする貨幣を創造する、という視点がより現実性を帯びてきたのである。

5. 貨幣の信用起源説

① US ドル (Fed の債務) と世界経済：

貨幣は商品という蛹^{さなぎ}からしか生まれることができないという宿命を負わされている、という誤った起源説からは、成熟した現実の資本主義のダイナミックスを説明することは難しい。それでも金鑄貨をもって法貨となしたスミスを含む古典派経済学の影響力は大きく、洞察力の優れたシュンペーターにしても、晩年の、彼を取り巻く戦後の状況が未だそれを確信させるところまでは見ることはできなかったのか、「实际的にも理論的にも、貨幣の信用理論 (credit theory of money) の方が、恐らくは信用の貨幣理論 (monetary theory of credit) よりも、もっと好ましいものであろう³⁵⁾」と自らの信用創造説を、幾らかひかえめに語らしめたのも、後者、つまり鑄貨から組み立てられた商品貨幣説が持っている学説としての伝統的圧力かもしれない。しかし、第2次大戦後の世界経済が驚くべきスピードで未開の地域を含む世界のほとんどの諸国を巨大な成長の足跡を実際に体験してきた世代は、もしも金 (gold) のような商品貨幣本位がなお持続していたとすれば、全く考えられなかったであろう戦後経済の成長展開の基礎に、「信用」がつくりだす債権・債務の決済システムを基礎にした銀行貨幣が持つ巨大な誘因力が根底に働いていることを明確にさせられたと思われる。もちろん戦後経済の奇跡的回復は膨大な戦後復興需要とそれを受け止めた高度の技術革新がベースにあった。しかし現実には、戦勝国を含めてアメリカ合衆国を除く殆どの国で資金は枯渇していた。かくして世界の記録的な巨額ドル不足の時代を迎える。アメリカによる外国公的当局保有ドルに限る金兌換義務

34) Schumpeter, 『同上訳書』2345 ページ。

35) Schumpeter, ibid, 『同上訳書』第4巻、1504 ページ。

協定を維持したままでのドル供給が可能であったのは1960年代末までであった。その後の世界経済は、トリフィン教授のジレンマ、—アメリカの経常収支黒字はドル不足を、さりとて赤字でもってドル供給を続ければアメリカの金保有は減りドルの基軸通貨制は弱体化する—を無視するかのごとく乗り越えて、拡大路線を続けることになる。すなわち1971年夏の金兌換停止後もドルの供給は、結果としては経常収支黒字国の通貨切り上げ（ドルの下落）を持続させながらもU.S.ドル支配を維持し2016年の初頭を迎えている。

戦後70年が経過した。この間、特筆すべきことは国際政治・経済の分野では社会主義国ソヴィエト連邦が経済崩壊し連邦制度が解体したこと、中国が社会主義的計画経済を市場経済に転換し共産党支配の政治と資本主義的市場経済との混合体制に移行したこと、ヨーロッパの経済統合が強化され共通通貨ユーロ圏を構築したこと、もちろん日本経済が単独でアメリカに次ぐ世界のトップの座に上昇したことも重要な事件であった。なかでも中国の経済力はその巨大な人口力を背景に世界先進諸国からの直接開発投資の効果の手伝い、世界最大の国際準備国に躍り出たことであろう。上述した戦後国際政治経済の特質が本論文にかかわる限りで共通な基盤は、アメリカ連邦準備銀行の対外債務であるUSドルがglobal Safe Assets³⁶⁾として共有され各国のベース・マネーの地位が確保された、いわゆるパクス・アメリカナが造りだした想像を超える富の豊かさとその伝搬である。基軸通貨ドルの安定的支配無しにはこれら諸事件の全ては全く別の恐るべき情勢を作り出したであろうことは想像に難くない³⁷⁾。

こうして世界経済の発展の上に、宇宙開発の成功がある。月への人類初めての上陸があり、今日欠かせないロボット工学の発明が、そして生命科学とがん克服への道を開いた医学の発見が続いている。そして一番大事なことは、こうした人間が史上初めて勝ち得た数々の偉大な成功は、人間の思想の自由が保障されている自由主義国による政治体制のもとでのみ初めて可能であったということである。そしてこれらの諸事業を助けた貨幣システムを、それは本物ではない、代用貨幣と呼んで意に介しない不思議なエコノミストの一群が今なお実在している不条理

36) IMF・Staff Paper., Safe Assets: Financial System Cornerstone, International Monetary Fund. April 2012, pp81-121 (Chapter 3). BIS ; Working Papers, No 399 ,Global Safe Assets by pierre-Olivier Gourinchas and Olivier Jeanne: Dec. 2012.

37) 米倉茂『ドル危機の封印—グリーンズパン—』2007年、イブシロン出版企画。第2章、「米国経常収支赤字化と対外債務との関係」、および最終章「ドル危機の幻影—ますますグローバル化する資本移動—」第6節「貯蓄から投資へ」の時代に直面するISバランス論参照。経常赤字でのドル供給を「法外なる特権」(exorbitant privilege)と捉える自称正統派を、資本収支黒字がファイナンスするバランスの健全性で論破する米倉の多産の著作集に正面から反論した論者を私は知らない。岡本恵也・楊枝嗣朗編著『なぜドル本位制は終わらないのか』文真(2011年、文真堂)所収の拙稿「ドル本位制の構造—銀行原理のオープン・システム—」参照。

をどのように解すればよいのであろうか。

② 私的信用と公信用、そして消費者信用

マルクスの絶対的貨幣、つまり真正手形の流通の限りでの貨幣の定義には、いかなる実体的姿態の媒介物も必要としない。マルクスはこれを「支払い手段の機能に限定して」と断（ことわり）を入れ、この関係性を明白に認めている。関係性、つまり債権と債務の相殺メカニズム（システム）、これをさらに抽象化した、より本質に迫る表現でいえば『信用』である。この商人相互間の信用システムが拡大し、より一層複雑・精緻に彫琢されたのが現在の成熟した資本主義の金融制度である。商人世界のなかで約束された極めてシンプルな枠組みだけの手形決済システムをひとまず「私的信用」と呼んでおこう。銀行制度が造りだす銀行貨幣（銀行預金と銀行券）の流通量は、もちろん「真正手形」の枠内にとどまらない。この現象、つまり通俗で言われる“過剰発行”は銀行券が兌換銀行券であるか不換銀行券であるかには関係ない。正確に言えば「貸付が」真正手形の枠を超えること自体は過剰な貸し付けとは同義ではないが、今は問わない。真正手形の枠を超えた貸付が新たな貨幣、動態的循環のなかの貨幣を定義する最初のモメントであった。この文脈では信用が貨幣の成立の基礎条件となる。貨幣があって信用関係が発生するのではない。貨幣の起源に関する研究は、言語の起源に関する研究³⁸⁾がそうであるように、戦後考古学の発展による古代貨幣に関する新しい発掘によって深められてきた。少なくとも金や銀の貴金属を原始とする商品貨幣論の絶対性はこれから一層その影を薄めるものと予想される³⁹⁾。

38) 互森央（たがい森夫）著『言語起源論の系譜』2015年、講談社。互は語る、[言語の生成とは言うまでもなく「非言語」から「言語」への移行であり、非言語には「自然」が当てられ、「動物」が当てられる]として経験的な人間が経験的に使う言語の生成・変化の歴史とは次元の異なる問題であることに言及している。貨幣の起源に照準をあてる探索とも共有される姿勢であろう。

39) 楊枝嗣朗『歴史の中の貨幣』第6章「貨幣の抽象性と債務性－貨幣の生成－」及び第7章「貨幣の歴史的鳥瞰」を参照。マルクス主義の経済理論のなかで貨幣の「抽象性」を主張することまでは尺度機能の観念化の境界線上で了解されうだろうが、さらに踏み込んで貨幣規定の必要条件に「債務性」を持ち込むとなると、これは『資本論』構成の論理的基礎をなしている「価値形態論」そのものの否定を旗幟鮮明にされたものと推測することもできる。かくしてこれまで「信用貨幣」と理解されていた銀行券が貨幣そのものと成る—そしてそれは紛れもなく正しいのだが—、分析の一段上の領域の利子生み資本のレベルをどのように処理するのかが問われることになる。擬制資本という概念内容を含めて用語そのものの再定義の必要が生じないのかどうか、かくして貨幣の起源を問う問題は、“Das Kapital”執筆の動機が、単なる資本主義社会の構造と機能の分析に留まらず、マルクスのいう「商品の物神的性格」を超克した新しい世界を問う問題に帰着するという基本姿勢から自立した別の（独自の）課題であるとすれば、それは何であるのかを問われている。

さて銀行信用のメカニズムが現代貨幣のカテゴリーを熟成させる基礎的要素の一つであることは今日大方の認めることであるが、それだけでは現代貨幣の特質は解明されない。国家、とりわけ財政当局との関わりが限界的に重要な要素として浮かび上がってくる。日本銀行・貸借対照表の資産項目に占める国債の比率は85%を超えている（前掲表参照）。これを以て、政府当局から独立した中央銀行としての日銀資産内容の劣化、とする見方をするのは一つの視点であるが、正しくはない。マクロ経済政策の観点に立つとき、もう一つの視点が求められている。日本銀行はもはや物価動向の監視役に限定して専念している状況にはないことは、マイナス金利導入という非伝統的政策の実施から見て周知されつつある⁴⁰⁾。本来は財政当局に委ねられている雇用と賃金水準に直接・間接関わる経済政策の一翼を公的に明示した方法で、財政当局との緊密な連携を強制されている次元を超え、例えば国債市場金利の決定を含めて金融市場に関与すべき段階に入っている。金融庁、財務省といった垣根争いは遠い過去の話である。大幅な財政赤字は放任されるべきではない。だが、予想をはるかに超えた急激な構造変動期を迎えている人口動態を救済できる原資が、いまや望むべくもない高度成長以外に頼ることができないときに、財政赤字動向と雇用・賃金の確保をシンテーズさせる金融政策の選択となると、国債市場と貨幣市場との調整が重要なポイントを握っている⁴¹⁾。かくして公信用、つまり政府当局への信用供与（裏返せば、国債という資産による日銀負債の担保）と逆に財務省側からの国債市場への干渉が織りなす金利決定が、実物市場の新しい投資需要と貸し付け増大に深く関与してくる。現代貨幣は、この意味では限りなく紙幣化している。しかしあくまで国債市場を包含した資本市場全体⁴²⁾を監察下に置く中央銀行システムが作り出す信用創造のネットワークである。そのなかでの貨幣の発行・還流の枠に抑制されておらねばならない。いわゆる政府による政府紙幣そのものの直接的発行とは異なる自己抑制機構のチェックが重要なポイントであることは言うまでもない。と言ってもここまで財政の赤字を抱え込む中央銀行の資産勘定の下で

40) 日銀信用と政府信用が共同で取り結ぶ最近におけるもっとも分かり易い一例をあげれば、〈日銀のマイナス金利政策で発行コストが大幅に低下した国債を増発し、日本政策投資銀行など政府系の機関を通じて最大で3兆円を貸し出し、新幹線の建設といった大規模な事業を進めやすくし、もたつく景気を下支えする（「日本経済新聞」2016.04.14）〉ことがある。この例では明らかに財務省がイニシアティブをとることになっている。

41) ユーロ・ゾーン諸国、とりわけギリシャの債務問題が深刻化している最大の理由は、共通通貨ユーロが、各加盟国それぞれの国家による債務保証を持たないままスタートしたことにある。財政赤字がGNP比3%以内とした規律は完全に無視され、今や200%にまで悪化している。ECUがそれをカバーすることは不可能である。政府信用によって確実に保証されていない「ユーロ」という人工貨幣の欠陥がここに露呈されている。

42) 本稿ノートは「貨幣」論の次元にとどまっている。「資本」市場の話はしたがってここでは関連的に触れているに過ぎない。

は、中央銀行の「債務」保障、つまり“LOLR”（Lender of Last Resort）として信任がいかに厚くても絶対的なものではありえない。それは金本位制下における兌換銀行券の流通の場合でも、結果としては幾度も過剰発行の危機を迎えたのと同じように、LOLRといえども、債務の過剰のリスク発生自体を今後とも完全に除去することはできないだろう。ともあれ中央銀行のLOLRに政府当局の「債務」としての最終支払約束が重ねられて、現代貨幣の特質は定義されることになる⁴³⁾。

さて、貨幣の債務性を論じる場合、これは「集合」としての信用論の大枠を構成する新たな範疇には属さないとしても（なぜなら、それは銀行信用の大枠には包括されていたはずだから）、その銀行信用のサブ・セットとして、特別に取り上げねばならないほどの比重を近年大きくしている分野がある。いわゆる消費信用がそれである。なぜなら GDP に占める消費の割合は資本主義の成熟度を測る決定的に重要な新しい物差しとしてなっているからである。19世紀から全世紀前半までの資本主義は、長い間「生産と消費の矛盾が織りなすエンジン」と言われながら、実は「生産」主導のメカニズムとして画かれ消費は分配論と労働問題に矮小化されてきた。信用の対象とするには質量ともに、無視されてきたのが実情であった。戦後世界の豊饒化は状況を一変させた。GDP に占める消費の比率がアメリカではすでに 70% を超え、日本もアメリカの水準に近づいている。資本主義の景気波動は、かつては重工業を基盤にした製造工業を中心に描けば十分であった。2007-09 のサブプライム・ローン恐慌で世界が周知したように、消費者向けの住宅ローン問題がマクロ経済波動の重要な要素であった。いわゆる高度大衆消費社会の出現である。消費者ローンを単にその規模の拡大のみで、信用創造を論じるこの項で取り上げたのではない。さらにクレジット・カードで代表されるノンバンクを通じての消費者ローンは、量的には信用供与全体の集合枠の部分集合として処理されるかもしれない。こうした伝統的な接近に対して、異端者としてではなく正統派オピニオン・リーダーとして切り込んでいる岡本恵也の主張を聞こう。

「サブプライム金融危機によって厳然として明らかになった高度大衆消費社会の歴史的変質を確認しておこう。自動車ローン、クレジットカードローンは今やアメリカの家計部門の消費生活に不可欠な生活のベースである。これらがアメリカの過剰消費の温床であるとの批判はともかく、家計部門がこれらのローンを利用しえなくなるということは、企業部門が運転資金

43) Wray (L. R.), *Understanding Modern Money*, 1998. Edward Elgar Publishing, pp.11-15. ただし、レイは Bank money を定義するに先立って Fiat money が政府債務 (state liabilities) として定義されている。アメリカ合衆国の政策意思決定の序列からすれば、フィアットマネー (ヘリコプター・マネー) がバンク・マネーに優先されるのは分かり易い。両者の関係については本稿での詳論は省かれている。

の調達に支障をきたし、流動性危機によって経営破たんするようなものである。連邦準備制度理事会はこれらの消費者ローン、住宅ローン担保とした証券化商品の買い入れ、担保とした貸出、非伝統的金融政策を実行した。中央銀行の最後の貸し手機能は企業から家計部門へ前進したのである。パジョットルールのコペルニクスの転回である」⁴⁴⁾。消費者信用のメカニズムが、「信用創造」の重要な一翼を担うまでに拡大・成長したことの意味は、真実の貨幣を探る本稿の狙いから見るとき何が指摘できるのであろうか？クレジット・ビジネスの特質は、最終的には加盟店取引銀行間の決済が中央銀行当座預金を介して決済される銀行信用システムを基礎にしているとはいえ、各加盟店と、その時初めて出会った不特定の消費者個人との信用関係からなっていることである。それは最初から身元が明らかで確かな信任の裏打ちを持つ企業に対する銀行ローンと比べるときその差は判然としてくる。後者の場合は、つまり企業相互間の手形取引を原型に持つので最終決済手段としての商品貨幣（金貨幣）の残影が臍帯（へその緒）のように残っているかもしれない。前者、つまりクレジット・カード加盟店とカード利用者（消費者）の間にはそうした相互信用関係を担保するいかなる物理的介在物は一切存在しない。また必要とされない。サイン（signature）ないしは pass-word のみで十分である。確かなシステムを介してとはいえ、経済社会の相互信頼関係は個人のレベルまで深まり、しかもこのシステムは今や世界の隅々まで all-over-the-world に連結し共有されている。かくして現代貨幣の極限の姿がある程度見えるようにまでなっている。現象ではキャッシュレス社会の完成に近づいている。しかし貨幣不要の社会ではない。反対である。貨幣は銀行預金という「システム」の多元的機能において自らの存在を一層鋭く自覚させられている。

本稿「ノート」についての一応のまとめ

―貨幣のユートピア幻想について―

貨幣は端末の形状や素材で、ましてや商品素材で定義されるような性格のものとは全く異なった、「関係性」で理解されるべき性質のものであり、したがって現代貨幣は、中央銀行の債務性として定義されるべき経済範疇とした方がより正確な表現であろうという筆者の主張はまだ始まったばかりである。それでも、このあたりで一応のまとめが必要であろう。

44) 岡本恵也「クレジットカードの理論」川波洋一・前田信一郎編『消費金融論研究』（2011年、消費金融論研究会）222ページ。

貨幣は、商品の「価値形態論から導かれて初めて生誕した」、という教義が教える性格のものとはおよそ反対のベクトルで定義した方がわかりやすい。現代貨幣は、価値形態論の貨幣から断絶されている。貨幣がいずこから出現していずこへ行くのか未だ確定できる段階まで人間の歩みは到達していない⁴⁵⁾。貨幣範疇の比較的成熟した姿態として現代の貨幣、つまり銀行貨幣（預金と銀行券そして末端の貨幣用具としてのプラスチック・カード）でもって終わると断言することはできない。「人間生活の諸形態に関する思索、したがってまたその科学的分析は、一般に現実の発展とは対立した途を進む。このような思索は、post festum〔後から〕始まり、したがって発展過程の完成した成果とともに始まる」⁴⁶⁾。もしこのマルクスの思索方法が正しければ、少なくとも 21 世紀の段階での完成された貨幣形態は、歴史のある一定期間のみに隆盛を見た「金本位制」における兌換銀行券や鋳貨、ないしはそれを基礎にした代用貨幣（現代貨幣のこと）と擬制資本体系から思索を下向させていくのではなく、現実に関の 21 世紀初頭に機能している貨幣と資本から思索を始めねばならない。前に触れたポランニの定義する「金本位制」（1815 - 1914）が機能不全となってから今年でちょうど 100 年を迎える。その間 2 度の世界大戦期間を含めて国際金融が最終的貨幣として依存してきた貨幣は、初めはロンドン・バランス（スターリング・ポンド）であり、ニューヨーク・バランス（U.S.\$）であった。純粋金本位制が崩壊した後、de facto の「基軸通貨本位」がこの 100 年の金融システムとして支配し、今日に引き継がれている。基軸通貨はその時代に支配した特定大国の国民通貨である。したがって国際通貨としては不完全な貨幣形態であることは論をまたない。そして最も新しい基軸通貨 U.S. ドルは金との交換性を持たない銀行貨幣（預金）と、それをベースにした紙幣である。それは連邦制度理事会（中央銀行）と連邦政府による複合的信用を「最終的支払債務」（Lender of Last Resort）とする「システム・マネー」である。

貨幣は金や銀の貴金属「商品」で代表される商品貨幣でなくてはならない、したがってそれ以外の貨幣形態は「代用貨幣」であると定義したマルクスは、資本主義生産様式の爛熟をどのように描いていたのか、『資本論』3 巻 資本主義的生産の総過程第 1 部第 5 編 27 章「資本主義

45) これからの貨幣形態に関しては二つのアプローチが考えられる。一つはハイエクの『前掲書』"The denationalization of Money" (1976)『貨幣発行自由化論』（本稿注 24）の提案になる貨幣発行業務の自由化論で、進行している金融自由化の極限状況として理論的には検討可能な課題である。二つ目は「仮想通貨」として既に部分的には市場に出回っている 'Bitcoin' の評価（例えば野口悠紀男著『仮想通貨革命』ダイヤモンド社（2014））や三菱 UFJ 銀行が実験に着手したと報じている「フィンテック」（IT を活用した金融サービスの一種【産経新聞 4/7 日】）など、今後続発が予想される新しい電子貨幣の問題である。両者とも本稿の直接の課題からは除外されている。IT 技術の高速進行が生み出すこれらの革新については改めてその検討は急がれている。

46) マルクス『前掲訳書』第 1 章 136 - 37 ページ。

的生産における信用の役割」と同第5編第28章「流通手段と資本」における叙述の中から二つ三つのフレーズを取り出し、それに筆者解題を加えておくことは、本来あるべき貨幣の未来を思索するのに意味ある示唆となるかもしれない。

第27章「資本主義的生産における信用の役割」のⅢ節「株式会社の形成」の3項から、「現実に機能する資本家の、単なる一経営者への、他人の資本の管理者への転化、及び、資本所有者の、単なる所有者への、単なる貨幣資本家への転化…」と続く、いわゆる株式会社における機能が所有から分離し、熟練労働の単なる労働賃金として俸給をうけとる一種の経営者に転化する有名なフレーズ。ここで重要なのは、この後に続くマルクスの予言である。

「株式会社においては、機能が資本所有から分離され、したがって、労働も生産手段および剰余労働の所有から全く分離されている。資本主義生産の最高の発展のかような結果こそは、資本が生産者の所有に、しかしもはや個別生産者の私有としてではなく、結合された生産者である彼らの所有として、直接の社会有として、再転化される途上の必然的な通過点である。また他面では、従来はなお資本所有と結合されていた再生産過程における一切の機能が、結合生産者の単なる諸機能に、社会的機能に、転化される途上の通過点である。」⁴⁷⁾ もはやこの過程では、『資本論』第1巻第1篇「商品と貨幣」第1章「商品と貨幣」で精密に思考分析された商品の「物神的性格とその秘密」から解き放たれた底抜けに明るい一筋の路が照らされている。ユートピア幻想の光を浴びた道が。そのユートピアに「結合された生産者」は強大なる国家「社会的所有」の手に集中されて「必然の自由」を享受できたはずだが、人と人との関係を「スミスの見えざる手 (invisible-hand)」に任せることができない誤れる「社会的所有」の罪は大きく、結局その実験は、「邯鄲の夢枕」⁴⁸⁾ に終わってしまったことは20世紀前半期を飾る偉大なる歴史的悲喜劇であった。諸個人の私的富と社会的富との間の対立を止揚し、商品と貨幣の物神性を克服したはずの社会主義国家官僚群のなかの選ばれた上級官僚を含む世界の著名政治家が、在り得るはずのない莫大な私的富を西インド諸島に浮かぶタクス・ヘイブン（租税回避地）に蓄蔵しているニュースが「パナマ文書」の中で暴露され世界を驚かせている。⁴⁹⁾

たかだか100年間の現代資本主義である。しかしそれが築いた富は、長い人類の歴史において比肩できるものではなく大きい。確かに富の格差は明白である。Windowsのビル・ゲーツに

47) マルクス『資本論』向坂逸郎訳（岩波書店）第3巻第1部第5編551ページ。

48) 人生の栄枯盛衰のはかなさをたとえた中国の故事。

49) 日本経済新聞・国際版、2016.4.07.及び4/9日。パナマの法律事務所「モサック・フォンセカ」から流出し世界に波紋を広げている「パナマ文書」(Panama Papers)。そこには米国と欧州を中心にパナマなどのタクスヘイブンの小国を組み込んだ「節税」ネットワークが構築され、体制を異にした世界の富裕層が名を連ねる構図が浮かび上がっている。

せよ Macintosh のスティーブ・ジョブズあるいは google の創設者の一人、ラリー・ペイジに、せよ巨億の富豪は実在している。彼らに共通しているのは新しいものに挑戦し開発したイノベーターであること、偉大なる創造者には富が集まる。資本主義のエトスの一つは、誤解を恐れず語れば、ある意味では格差である。投機業者として名高いソローにしても想像を絶する工夫とエネルギーの投入があつて初めての成功である。⁵⁰⁾

「商品の物神性的性格、すなわち価値形態に潜む貨幣の魔術と妖怪」に人間が本当に翻弄されて来たのだろうか？逆である。社会は商品交換の高度に発達したシステムを通じて形成された人間関係の集合体である。いまや天文学的数に達した商品種類とサービスが複雑に織りなす交換システムこそが、ひとりひとりの人間が社会のなかでどのような位置にあるのか、いかに生きるべきかを示唆することができる物差しである。自由な商品交換社会のみが、人間にとっての適切な法と秩序の在り方が如何にあるべきかを示唆してくれる。自由な競争的節度を持つ市場のなかでこそ、人間は自己の相対的価値を、家族や企業のなかで、そして地域と国家における自らの価値を初めて認識することができる。そうした自己認識を誘導し、状況に応じて的確な意思決定を示唆しているのが自由市場の競争的価格メカニズムであること、そのメカニズムを適切に尺度するものの重要な一つが貨幣であること論を待たない。したがって、その貨幣は、現実には経済社会で機能している現代貨幣（銀行貨幣）でなければならない。（未完）

50) 格差が残酷テロを生む社会現象の背景は時代を画する独自の世界史的な課題であり、ここで容易に言及することはできない。